

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520768

研究課題名（和文）関野貞による朝鮮古蹟調査の再検討

研究課題名（英文） Re-examination of research on ancient remains and relics by SEKINO Tadashi in Korea

研究代表者 早乙女 雅博 (SAOTOME MASAHIRO)
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：80150035

研究成果の概要(和文):植民地期朝鮮での古蹟調査は1900年から開始され7期に分けられる。東京大学が所蔵する土器は、その第2期に関野貞が採集したものであることが明らかとなった。これらの土器破片は、朝鮮遺跡調査略報とフィールドカードの検討から、高霊、昌寧及び咸安、下詩洞、慶州西岳里から出土したもので、写真、拓本、記録を作成しデータベース化した。未公表の考古学資料を研究資源化して公表することにより、日本と韓国の資料を合わせて研究することが可能となった。

研究成果の概要(英文): It is started from 1900 and research on ancient remains and relics in the era of colonial Korea is divided into 7 terms. The potteries which the University of Tokyo possesses became clear to the 2nd term of it and the collections of SEKINO Tadashi who was a professor of the Imperial University of Tokyo.

From examination of Korean ruins abbreviated report and field cards, it became clearly these pottery fragments were unearthed on Koryong, Changnyon & Haman, Hashidong and Kyongju-Soakli area. We created and put a photograph, a rubbed copy, and character record in a database.

By carrying out research resources and releasing uninvestigated archaeological data, it became possible to set and study the archaeological data of Japan and South Korea.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700.000	210.000	910.000
2010年度	600.000	180.000	780.000
2011年度	700.000	210.000	910.000
年度			
年度			
総計	2.000.000	600.000	2.600.000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学、朝鮮古蹟調査、考古学史、関野貞

1. 研究開始当初の背景

(1) 東京大学には、1945年以前の植民地期朝鮮の古蹟調査の時に収集された考古学資料が良好な状態で所蔵されている。その一部の資料を1997年に「江原道の土器と古墳」(『朝鮮文化研究』第4号、東京大学文学部朝鮮文化研究室)として発表した。その時の資料調査で、多くの土器破片が未整理の状態であることに注目した。

(2) これらの資料は、上記の調査時に1916年に「古蹟及遺物保存規則」が制定される以前の関野貞(東京帝国大学)が収集・作成した資料の一部と推定された。

(3) その後2003年に新たに、これらの土器を収集したと考えられる関野貞が残した「フィールドカード」が見つかり、それを整理して『関野貞コレクション フィールドカード目録』(東京大学総合研究博物館、2004)を刊行して、考古学資料と記録資料の両者からの研究が可能となった。

(4) 完全な形で残っている土器は、その後研究者により調査報告されたが、土器破片は未整理のままであったが、「フィールドカード」の発見により、「これを整理し調査研究することが可能となった。

2. 研究の目的

(1) 関野貞によって採集されてから100年の後に初めて明らかにされる土器破片資料であり、土器破片の報告書を刊行することにより、韓国の考古学研究者も研究資料を共有することができ、韓国考古学に果たす意義は大きい。

(2) 植民地期朝鮮での日本人の古蹟調査の内容とそれに基づく考古学研究成果を明らかにし、公開していくことは我々研究者の責務と考えている。

(3) 植民地期に得られた考古学資料と戦後の韓国による発掘調査で得られた資料を合わせることで、より詳細な研究が可能となる。ここでは、新羅、伽耶の土器研究に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 土器破片の整理調査とデータベース化を下記の作業順で行う。
水洗によるクリーニング→破片の接合と器形復元→写真撮影→文様及び調整技法の拓本と土器の実測図作成→土器観察表と画像データを合わせてデータベース作成

(2) 土器破片出土地に関する記録資料—「朝鮮遺蹟調査略報告」及び関野貞資料のなかの「フィールドカード」—の読み解きを行う。

(3) 韓国での実地踏査及び関連古墳群と出土遺物の調査及びソウルでの植民地期古蹟調査資料の調査を行う。

(4) 咸安地域、昌寧地域の伽耶と慶州を中心とする新羅との関係について、これまで報告された資料と今回新たにデータベース化した土器をもとに考察する。

(5) 遺跡出土土器に関する研究成果のまとめを行う。

4. 研究成果

(1) 植民地期の古蹟調査は次の7期に分けて進展し、それぞれに段階で特徴をもつ。

1期 1900～1908年、東京帝国大学による調査
2期 1909～1915年、統監府・総督府地方局の古蹟調査と学務局の史料調査、1909年に関野貞が統監府度支部の依頼により古蹟調査を本格的開始。

3期 1916～1920年、総務局総務課と博物館による組織的古蹟調査の開始。文化財保護法である「古蹟及遺物保存規則」を施行、調査担当者が限定され、その結果として日本人のみが調査担当となる。

4期 1921～1930年、古蹟調査専門担当機関であるの学務局古蹟調査課の新設

5基 1931～1932年、財政危機による外郭団体「朝鮮古蹟研究会」の設立

6期 1933～1935年、「朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存令」発布、保存委員会を設置する。1932年に満州国が成立し、満州の古蹟調査に朝鮮古蹟調査に関わった研究者が参加する。

7期 1936～1945年、古蹟調査事業を継続するが、1941年以降は縮小した。

(2) 2期の1910年と1912年に関野貞が収集したと考えられる土器は5か所の遺跡からの採集品であるが、晋州の土器は完形品のみで、破片は所蔵されていない。完形品の土器に朱書きされた番号をみると高霊た780D、主山東南山腹古墳た787、た788、水精峯第2号墳た790～た793(晋州)、玉峯第7号墳た799～た806(晋州)、楓湖東北古墳た822～た829(江陵)とあり、高霊、晋州と江陵の間には、番号の開きが認められる。その番号の間を埋

めるのが今回調査した昌寧・咸安、下詩洞里から発見された土器破片である。その土器片が収納された木箱には、昌寧・咸安た 821、下詩洞里た 821 とあり、昌寧・咸安は下詩洞里と同時に登録された。「朝鮮遺蹟調査略報告」と記録年月日が描かれた「フィールドカード」の検討からも 1910 年と 1912 年に収集された土器片に間違いはない。高霊土器破片には、た 780D と朱書きされた杯に墨で書かれた「高霊」の書体と同じ書体で墨書された土器片が含まれていること、下詩洞里古墳群発見土器と同じ形の木箱に収納されているので、これらの土器片は主山東南山腹古墳を調査したときに採集されたと考える。

(3) 高霊発見土器

2 つの木箱に 3 か所に分かれて収蔵される。幅広の木箱をさらに木板で区画して小区画 (A と呼ぶ) と大区画 (B と呼ぶ) に分けて、それぞれに 8 点と 18 点が収められる。下詩洞里古墳群発見土器と同じ幅細の長方形の木箱 (C と呼ぶ) には 31 点がある。これらの土器を箱・区画ごとに説明する。

A 区画には 8 点が入り、1 から 3 が高杯形器台の口縁部、4 は筒形器台の脚部 5 から 7 は長頸壺であるが、7 は蓋受けが破損している。8 は短頸壺の口縁部である。

B 区画には 18 点が入り、9 が蓋杯、10 から 15 が高杯形器台の口縁部が残る身部破片、16 と 17 は器台身部の破片、18 から 20 は長頸壺の頸部、21 と 22 は短頸壺の口縁部である。23 と 24 は灰白色の土器片であるが器種は不明である。25 と 26 は褐色軟質の把手である。

C 箱には 31 点が入る。27 から 31 までが杯蓋であるが、鈕の形態により 27・28 と 29・30 と 32・33 の 3 種に分かれる。34 は把手付碗、35 は大型の長頸壺の口頸部で円圏文が施される。36 は小型壺で頸部に円圏文、肩部に三角鋸歯文がまわる。37 は短頸壺口縁部、38 は格子叩きで厚く、器形は不明。39 から 41 は高杯形器台の口縁部や身部、42 から 44 は脚部である。45 から 57 は筒形器台で、胴部には細長い装飾帯が付き、その左右に三角形透窓があく。

これらのなかには所謂「高霊式長頸壺」が 3 点含まれるほか、3 種類の形態の蓋の紐があることが確認され、また筒形器台が多数含まれる特徴があった。

(4) 昌寧咸安発見土器

細長い木箱を 2 区に分けた 1 つに収蔵される。「任那及新羅時代 (朱書) 昌寧・咸安附近発見品 (墨書) た 821 (2 組ノ内) (朱書)」と

書かれた紙が画鋏で留めてある。すべての土器に「昌寧咸安」と墨書される。1 は長頸壺の蓋で 2 段に集短線文がまわる。2 から 6 までは杯蓋で 2 段に点列がまわる。6 は内外面とも褐色であるが、これは焼き損じたためである。7 と 8 は高杯の身部、9 から 22 までは壺である。9 は短頸壺の口縁・胴部であり 10、11、12 と同一個体と考えられるが接合しない。23 は細長い長方形の透窓が交互に配置された身底部付き脚であるが、その径は高杯より大きく、高杯形器台より小さい。24 から 34 までは器台の破片である。26、27、28 は高杯形器台の口縁部、33、34 は高杯形器台の脚部である。

昌寧、咸安は地域の異なる古墳群であるが、土器の注記には「昌寧、咸安」と書かれ区別ができない。戦後に調査された古墳の土器と比較すると、多くは昌寧出土の土器であるようだ。

(5) 下詩洞里発見土器

土器を収納した木箱 (本来収納された箱ではなく、転用された箱) には、「江陵資可谷面下詩洞里古墳発見」と墨書された紙が画鋏で留めてある。土器には何ら注記がなく、この墨書で下詩洞里から発見されたことがわかる。1 から 37 までは硬質の土器、39 から 44 までは軟質の土器である。38 は器台の破片で、表は波状文がほどこされ色調は褐色である。裏は灰色をしているので、硬質の器台の焼き損ねである。1 は高杯の身破片、2 は長頸壺の蓋、3 から 7 までは高杯の脚部、8 から 14 までは長頸壺あるいは短頸壺である。15 から 22 までは器台の身部、23 から 34 までは器台の脚部で、15 と 23 は高杯形器台の口縁部と脚部である。それに対して 24、26 は筒形器台の脚部である。35 から 37 までは同一個体で 3 段の透窓が交互に配された脚をもつ小型の高杯形器台である。

(6) 慶州西岳里石枕塚出土土器

①短頸壺; 6 片に割れていた破片が接合され、器形全体がわかる。底部に「慶州郡西岳洞」の墨書あり、胴部にも「慶州西岳洞」の墨書口縁部は 1/3、胴部は 1/2、底部は全部残る。

②短頸壺; 4 片に割れていた破片を接合して口頸部全体を復元できる。古蹟図譜の写真をみると、頸部に 1 条の縄が廻っているが、この縄は写真撮影のために縛ったもので、本来はない。また、『古蹟図譜』第 3 冊 1205 の右に見える小破片は東京大学所蔵遺物にはない。暗灰色で硬質の短頸壺で、頸部内面には土が付着している。頸部は緩やかに外反し、

口縁は水平に開き、その端部は上縁と下縁が鋭い稜となる。口径 11.6cm、口頸部高さ 3.9cm。
③杯蓋;完形の杯蓋で、天井部内面に「た 852」の朱書きと「慶州西岳洞」の墨書がみられる。口縁部は低く内傾し、天井上部にはスタンプによる直径 6.5mm の半円圏文と線刻による三角鋸歯文が廻る。谷井濟一が「直線と孤とより成れる簡単な沈文線」と表現した文様である。つまみは基部が細く先端は大きく外反する。天井部外面とつまみには自然釉がかかるが、一部剥落している。天井部内面は灰色で、口径 10.9cm、器高 5.9cm。石室内左側壁近くの檀上から出土した。奥壁側の石枕に安置された最初の被葬者の副葬品か、左側壁側に追葬された被葬者の副葬品かは不明である。

(7) (2) により資料の信頼性を確保し、撮影、実測図作成と (3) から (6) によりデータベースを作成し、植民地期の未公表資料を研究資源化することができた。これにより、韓国の研究者と情報を共有することができ、戦後の発掘調査の資料と合わせることでより研究の進展が望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

早乙女雅博、総論植民地期の朝鮮考古学、査読無、考古学ジャーナル、596 号、2010、pp. 3-5
[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 3 件)

早乙女雅博、同成社、新羅考古学研究、2010、370

早乙女雅博、慶州西岳洞石枕塚出土遺物、国立慶州文化財研究所、新羅古墳精密測量及び分布調査研究報告書、2011、pp. 247-251 (原文ハンダ)

早乙女雅博、関野貞による朝鮮古蹟調査の再検討 (科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書)、2012、28

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等 無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早乙女 雅博 (SAOTOME MASAHIRO)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80150035

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：